

ルカによる福音書19章1-10節 「イエスには出来る救い」

1A 宿泊を決めておられたイエス 1-7

1B エリコと取税人 1-2

2B 家の宿泊 3-6

3B 罪人の客 7

2A 救いを確かにされたイエス 8-10

1B 悔い改めの実 8

2B 救いの訪れ 9-10

本文

ルカによる福音書 19 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ルカ 18 章まで来ました。そして今日は、19 章 1-10 節まで読んでいきたいと思えます。まず、全部を読んでみましょう。

1 それからイエスはエリコに入り、町の中を歩いておられた。2 するとそこに、ザアカイという名の人がいた。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。3 彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見るができなかった。4 それで、先の方に走って行き、イエスを見ようとして、いちじく桑の木に登った。イエスがそこを通り過ぎようとしておられたからであった。5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7 人々はみな、これを見て、「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言った。8 しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

実に美しい、救いの御業です。金持ちになっているものの、人々からだまし取り、嫌われていたザアカイに、イエス様が近づいてくださり、それで全く変えられた人間になりました。

イエス様の旅は、エルサレムに限りなく近づいています。前回、エリコに近づいたということが書いてありました。そして、主はそこでも、人を救われる働きをされました。盲目の人が、「ダビデの子よ、私をあわれんでください。」と叫んだのです。イエス様が、「わたしに何をしてほしいのですか。」と尋ねたら、「主よ、目が見えるようにしてください。」と答えました。そして目が見えるようになりましたが、この彼の大胆な信仰を主は見ておられて、「あなたの信仰があなたを救いました。」とされています。このようにして、エリコの入口にて、イエス様について行く新たな弟子が起こされました。

た。そして今、エリコの中に入っておられます。

1A 宿泊を決めておられたイエス 1-7

1B エリコと取税人 1-2

1 それからイエスはエリコに入り、町の中を歩いておられた。2 するとそこに、ザアカイという名の人がいた。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。

当時、エリコには二つのエリコがありました。一つは、旧約時代のエリコです。ヨシュアたちがヨルダン川を渡って、そこにあったカナン人の町です。また、エリシャはエリヤの働きを受け継いで、ヨルダン川を分けて、それからエリコに入り、飲めなくなった水に塩を入れて、きれいな水にしたという奇跡を行っています。この町はまだ存続していたのですが、ヘロデ大王が新たに、冬の宮殿を建てました。そしてそこが、当時にいわゆるリゾート地になったのです。ちなみに、エリコは「棕櫚の町」としても知られていて、泉が出て来ていてオアシスになっていました。それで栄えていたのです。

そして、ここは取税人たちのいる町でした。ここから人々がエルサレムに向かうので、通行税を徴収する収税所があった裕福な町だったので、物品税の収入も大きかったのです。その中で、ザアカイは、「取税人のかしら」でありました。彼は他の取税人たちを雇っていました。それだけでも、彼には大きな収入が得られていたはずですが、それに輪をかけて、課せられている額以上のものを徴収したので、それで大金を得ていたのです。

ローマからの徴税ということだけでも、ユダヤ人はそれを憎んでいましたが、さらに自分の懐に入れていたザアカイは、憎しみの対象でしかありませんでした。パウロが、テススに対して、「3:3 私たちも以前は、愚かで、不従順で、迷っていた者であり、いろいろな欲望と快楽の奴隷になり、悪意とねたみのうちに生活し、人から憎まれ、互いに憎み合う者でした。」と言いました。富は持っていたけれども、まるで幸せとは程遠い生活を送っていたのです。

ところで「ザアカイ」は、「純真」という意味を持っています。彼の親は、自分の息子に純真さを求めていたのでしょう。けれども、彼はまるで違う道を辿りました。私は、ザアカイを見る時に自分のことを思います。清正という名前ですが、そのまま「清く正しい」です。けれども、ここに見るように、心の自己中心な姿を自分で見る時に、人々に憎まれ、疎まれるような人間であることを思います。

2B 家の宿泊 3-6

3 彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることはできなかった。4 それで、先の方に走って行き、イエスを見ようとして、いちじく桑の木に登った。イエスがそこを通り過ぎようとしておられたからであった。

興味深い話です。「背が低かった」とのことですが、当時は今よりも平均身長がかなり低く、さらに背が低いので、ザアカイは 150 釐を切っていたのではないか？と思われます。彼に、ある種のコンプレックスがあったとしても不思議ではありません。当時、背が高いことが容姿の良さの一つとして数えられていたのは、かつてサウルが、容姿が良いことと並んで背が高かったことが書かれています。そこで、彼の取税人のかしらとしての金儲けは、そのコンプレックスの裏返しであったもしれませんね？。しかし、彼の心は飢え渴いていました。イエスが来られたということで、必死になつて見ようとしていました。

そして、人々から笑われてしまうようなことを行いました。いちじく桑の木に登ったのです。エリコは、ユダの荒野に囲まれた町ですから、基本、亜熱帯の気候です。それにふさわしい木々が生えています。その中の一つが、いちじく桑の木です。枝が幹の低いところから出ているので、上り易かったでしょう。けれども、猿じゃないんだから、大の大人が木登りをして恥ずかしくなかったのか？と私たちは思ってしまうでしょう。けれども、信仰を働かせる人々は、群衆に阻まれても、何をされても、それでもイエス様のところに来ようとするのを私たちは見えています。中風の男も、四人の友人が彼を床に乗せて、群衆に妨げられているから、屋根まで連れて来て、屋根の一部を壊して、そこから床を降ろしたのです。信仰というのは、どんな妨げがあっても、それでも前に進む大胆さ、図々しさが必要なのです。特に大勢の人にとって、嫌だと思われることであっても、それでも「イエス様に会いたい！」という一心で前進するのです。

5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。

ここに、ザアカイの話にある、驚くべき救いの真理があります。それは、「私たちが主を見出そうとする前に、すでに主が私たちを見出しておられる。」ということです。「泊まることにしているから。」と言われてますね。もう既に、ザアカイに神の救いをもたらすことにしていた、といっても過言ではありません。

イエス様が、サマリアの女に会われる時もそうでした。女は、イエス様がメシアであることを知り、大喜びで町中に言い広めましたが、彼女はそもそも、イエス様に関心がなかったのです。そして、世間的には大変、不道德な女で、他の女性が来ない時を見計って、正午に井戸に水を汲みに来たのです。けれども、そこに既にイエス様がおられました。井戸の傍らで座っておられました。ヨハネ 4 章 4 節には、「しかし、サマリアを通って行かなければならなかった。」とあります。それは、地理的にサマリア地方を通らなければいけなかったということではなく、必然的に、そこにご自身を信じる女がいることを知って、そこを通らなければいけなかったとしています。私たちが主を求め以前に、主ご自身が私たちを捜して、救い出そうとしておられたということです。イエス様は、「6:44

わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。わたしはその人を終わりの日によみがえらせます。」と言われました。ここでも、すでにイエス様がザアカイを知っておられ、そして彼の家に宿泊することにしておられたのです。

そして、イエス様は、「**ザアカイ、急いで降りて来なさい。**」と呼びかけておられます。イエス様が、「純真な者、清い者、急いで降りて来なさい。」と呼ばれているのです。ザアカイにとって、その名にかなわぬ全くそうではない自分がいます。そしておそらくは、強い劣等感を持っていたことでしょう。しかしそこでイエス様は、彼を、人格を持った一人の人としてその名を持って呼ばれたのです。もちろん、イエス様は彼のことを知らないはずで、一度も会ったことのない人を、まるで前から知っておられるかのように、名をもって呼ばれたのです。イエス様は、ユダヤ人、アブラハムの子孫である彼に対して、次のことを思われていたかもしれません。「イザ 43:1 **だが今、【主】はこう言われる。ヤコブよ、あなたを創造した方、イスラエルよ、あなたを形造った方が、「恐れるな。わたしがあなたを贖ったからだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたは、わたしのもの。」**主ご自身が、神の名をみだりに唱えてはならないと言われたように、名というのとその人格は深くつながっています。主はご自分の名によって、ご自分の本質を表されました。

ですから、ザアカイという名を呼ばれたというところに、彼はどれだけ癒されたことでしょうか！主は、みなさんお一人お一人も、名をもって呼んでおられます。そしてその救いを心に受け入れた者には、聖書のいろいろなところに、新しい名をもって呼ばれ、神がご自分の書物に書き記して下さっているのです。しかも、それは永遠の昔に定めたこと、永遠のご計画であったのです。

そして、「**わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。**」と言われてますね。「今日」とは、物理的な今日ということだけではなく、救われる記念すべき時という意味合いがあります。後で、「今日、救いがこの家に来ました。」と言われます。そして、十字架にイエス様の横で磔にされていた男、悔い改めていた男に対しても、「**23:43 あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。**」と言われました。

そして、「**家に泊まる**」ということは、大きな意味を持ちます。とても私的な空間ですね、そこに共に時間を過ごすということです。ヨハネの福音書では「とどまる」とも訳し、また「宿泊する」とも訳している言葉です。弟子たちと宿泊する時も、ご自分の言葉が彼らに留まる時も、同じギリシア語「メノウ」が使われます。ルカによる福音書でも、エマオに行く途上の二人の弟子に復活したご自身が現れ、そこで共に宿泊して、パンを裂かれた時に、弟子たちはこの方がイエスだと分かったのです(24:28-32)。パウロが、エペソにある教会に対して「**3:17 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。**」と祈られています。主が、信仰によって皆さんの心にも住んでくださるのです！

そしてザアカイは、「**急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。**」とあります。イエス様が名をもって呼ばれたところに、彼は、神ご自身を心の中で感じたのでしょう。そのまま従っています。そして、喜んで迎えています。ここに正しい応答があります。恵み深さに対して、それを受け取る側も恵みをもって受け取るのです。多くの方が、神の気前良さ、惜しみなく与えられることに対して、それを愚かにも遠慮するということがあります。自分がもったきちんとしてから受けとります、となるのです。恵みを持って受け入れます。子供たちがイエス様に触れる時に、弟子たちは妨げようとしたのですが、イエス様はそのままにさせました。その子供たちのように神の国を受け入れるのです。

3B 罪人の客 7

7 人々はみな、これを見て、「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言った。

これが、イエス様がなされていること、つまり神の救いについての一般的な反応です。まずもって、自分のほうから宿泊を要求するのは、当時でもありえない習慣です。その地域は、旅人をもてなすこと、家に受け入れることは当たり前のこと、義務とさえなっていました。今でもアラブ人の社会では、見知らぬ人が家に招かれ、宿泊さえすることもあります。けれども、自分のほうから「あなたの家に泊まることにしているから」というような人は、あまりにも横柄です。そして、エリコには、多くの宿泊所があります。新約時代の新しいエリコの町はリゾート地のようになっていましたから、イエス様は他のところでも泊まることはできたのです。けれども、何を持って、取税人の頭の家泊まるのか？ここに大きな不満がありました。

しかし、ここに神の栄光が現れているのです。それは、恵みの栄光だからです。恵みはしばしば、人を怒らせます。人々に不満を抱かせます。なぜなら、恵みは受けるに値しない人が好意を受けることだからです。神は恵みに満ちた方であり、神の賜物を受けるに値しない者たちに注がれることをこの上のない喜びとしておられます。憐れみに満ちた方だからです。そして、このことをもってして、初めてザアカイが悔い改め、違った人間となります。イエス様は、ザアカイがそのまま貪欲の中にいることを喜んでおられません。けれども、彼が神のかたちがその内で損なわれていること、そのことに痛みをご自身感じておられて、そして神の愛を惜しみなく注いでおられるのです。その豊かな憐れみをもって、人は悔い改めに導かれるのです。「神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導く」とローマ 2 章 4 節にあります。

2A 救いを確かにされたイエス 8-10

1B 悔い改めの実 8

8 しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」

ザアカイは、イエス様を「**主よ**」と呼んでいますね。ザアカイの話が、18 章に出て来る金持ちの指

導者のすぐ後に出てきていることを思い出してください。彼は、イエス様のことを「良い先生」と呼びました。神にしかない「善」というご性質がイエス様にあるのを見て取ったのに、イエス様を人間の教師にしか見ていませんでした。そこで、「18:22 あなたがたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。」とイエス様が言われたら、彼は非常に悲しんで、その場を離れたのです。そしてイエス様は、「富を持つ者が神の国に入るのは、なんと難しいことでしょう。」と言われます。それは、「らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」と言われたのです。弟子たちは、それではだれが救われるのか？と驚いたら、「18:27 人にはできないことが、神にはできるのです。」と言われました。そうです、今ここで、ザアカイが示している姿勢は、まさに神業、神にしかできないことなのです。ザアカイが、確かにこの方を神からの方、主ご自身であることを知って、受け入れ、すべてを明け渡したからこそできたことなのです。神の恵みをそのまま喜んで受け入れたからこそ、心が新しくされ、神の御心を行いたいという思いが与えられたのです。

そして、「**四倍にして返します**」というのは、盗んだ時の返済の時に律法に定められているものです。「出エ 22:1 人が牛あるいは羊を盗み、これを屠るか売るかした場合、牛一頭を牛五頭で、羊一匹を羊四匹で償わなければならない。」彼は、自分が盗んでいたという罪の自覚が与えられ、それで四倍にして返すと言ったのです。このようにして、かつてバプテスマのヨハネが、悔い改めの実を結びなさいと人々に説いたことについて、ザアカイの中にはっきりと見ることができます(3:8,12)。

2B 救いの訪れ 9-10

9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

主が、ここに救いが訪れたことを宣言されました。ザアカイのイエス様を迎え入れる喜びと、悔い改めの中に、すでに神の救いが働いているのを見ることができました。そしてイエス様は、「**この人もアブラハムの子なのですから**」と言われています。アブラハムの子孫であるということこそ、イスラエル人の救いの保障でした。アブラハムに対して、あなたを祝福して、あなたの子孫をもって祝福すると約束を神がされていました。ですから、ユダヤ人は自分たちがアブラハムの子孫であることを、幼子の男子への割礼によって、それを印として受け入れ、そして自分たちが神の民であり、救われており、神の国に入れることを保障するものでした。けれども、先にお話したように、バプテスマのヨハネは、「3:8 神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起すことができます。」と言って、神の怒りを免れることはできないことを説きました。

真実な意味で、アブラハムの祝福にあずかるのは、へりくだり、悔い改め、そして信仰をもって神の恵みを受け入れる者たちであります。主は、病の霊につかれて腰が曲がって、全く伸ばすことのできなかつた女に手を置いて癒されましたが、「13:16 この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。」と言われました。この女にしても、ザアカイにしても、

社会的には疎外されている人々です。しかし、主はアブラハムの子だという理由だけで、救いを与えておられます。これが神です。神はえこひいきをなさいません。そして皆さんがどんなに、人々から憎まれ、人々から蔑まれ、また自分自身の罪によって、失敗によってどんな状態になっていても、イエス様は、「あなたは、愛する我が子」であると言ってください。イエスを主として信じている者であれば、ユダヤ人でなくとも、異邦人もアブラハムの祝福にあずかることが、ガラテヤ書に書いてあります。「ガラ 3:14 それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。」

そして最後に、主は、「**人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。**」と言われます。以前、失われた者を捜すご自身の姿を、百匹の羊飼いが、迷い出る一匹のために捜しに出た話で語っておられました。十枚の硬貨の一枚をなくして家の中をくまなく捜す女に喩え、そして、放蕩息子を迎え入れる父の姿にも表しておられました。そこでの喜びは、失われていたけれども救われた本人はさることながら、いやそれ以上に、神ご自身が、主ご自身が喜んでおられるのです。

実は、数日前、ある方から手紙を受け取りました。そのことで、ザアカイの話がまさに自分であることを思い出していました。実家に、韓国から手紙が来たのです。なんと、私が高校生の際に文通していた同い年の韓国人高校生の娘さんからでした。当時、私は何人かの海外の人たちと、ペンパルの友達になっていました。その中の一人だったのです。本人はもちろん、私と同じ年ですからこの年齢になっていて、娘さんが日本に交換留学したこともあり、日本語でお母さんの代わりに書いてくださっていたのです。もう30年以上経っていますから、はたして実家に私が住んでいるか、そもそも、その家から引っ越したのではないか？ということも考えながら、恐る恐る書かれたのだと思います。私たち日本人でもここまで丁寧ではないだろうと思われるほど、とても丁寧な日本語の文章で書いておられました。そして、娘さん本人は、日本に来年、就職する予定だということです。お母さんは、私のことがどうなったのか、ずっと気になっておられたそうです。それで日本に行く娘に託したようです。

私は思い切って、これまでの自分の経緯を書いて返事をしました。その後、間もなくしてキリスト者となったこと。そしてアメリカで聖書教育を受けて日本に戻ってきたこと。それから、韓国語の学習も、海外宣教に従事していたこと。そして今は教会を開拓して牧師をしていることです。相手がクリスチャンかどうか全く分かりませんが、ごまかしたところで、隠しようがありません。そうしたら返事が来て、驚きました。四人のご家族ですが、家族そろって12年前に信仰を持ったということです！私もびっくりしましたが、相手はもっとびっくりしているようです。私は、一般企業に入って、バリバリ働いて、世的に成功した人生を送っていると思っておられたようでした。そして日本はクリスチャンが少ないことを知っているのに、クリスチャンだけでなく牧師にまでなっていると、とびっくりしていました。

私は、自分の高校生時代のことを思い出しました。まさにザアカイのような者であったと思います。周りの人を蹴落としても受験戦争で勝とうという闘争心はありました。自分のことしか考えていませんでした。そして、自分は人から嫌われているという劣等感もありました。けれども、どうやったら人とうまく折り合って生きるのかも知りませんでした。その時に、こんな惨めな自分に、イエス様は名をもって呼んでくださり、私の心の住まいに入って来てくださったのです。主は、日本ではこんな私を救うために捜しておられ、韓国ではそのご家族を救うために捜されたのだと思いました。

これが、主の心です。私たちが主を求める前に、既に主は私たちを捜しておられます。その三十年前のペンパルが、わざわざ娘さんの助けを借りて私のことを捜してくれましたが、永遠の昔から知っておられる神は、みなさんお一人お一人を捜して、救われようしておられるのです。そして、その恵みは、恵みを受けるに値しない者たちに与えられています。惨めな時、劣等感でいっぱいな時、今の人生がどうしようもなく、自分には何もよい物がないことを痛感している時、すでにイエス様はご自分のそばにおられます。